

目次

1. 新事務局より
2. 旧事務局より
3. 前年度編集責任者より
4. 新編集委員より
5. 本年度編集責任者より
6. 2009年度例会予定
7. 各地の研究会だより
8. 「フランス語研究促進プログラム」による共同研究について
9. 留学に関する情報
10. 収支決算報告
11. 編集後記

1. 新事務局より

2009年4月1日から今後3年間、事務局は大阪大学言語文化研究科に置かれます。現在同研究科には、編集委員の春木仁孝、三藤博、井元秀剛の3人と旧編集委員の木内良行の計4人が所属していますので、業務は4人で協力して行っていくことになります。連絡先は以下の通りです。

〒560-0043 豊中市待兼山町1-8

大阪大学言語文化研究フランス語資料室内

日本フランス語学会事務局

e-mail : belf-bureau@lang.osaka-u.ac.jp

大阪大学言語文化研究科では2000年から2002年にも事務局を引き受けていましたが、そんなに時間がたたないうちに再び大阪大学で事務局を引き受けるにあたり、編集委員会での検討の結果、事務局の仕事のやり方に関して大幅な変更を行うことになりました。これは主として、今後、事務局を引き受ける大学の編集委員の負担を少なくすることを目的とした変更です。

これまでは春の仏文学会開催時に行っていたシンポジウム会場で、会費の直接徴収と当該年度の『フランス語学研究』の配布を行うためのスタンドを出していましたが、今年度からはスタンドは出さないことになりました。

事務局にとっては仏文学会開催時のスタンドでの業務が一番大変な仕事となっていました。学会開催にあわせて完成したばかりの『フランス語学研究』を、来場する人の数を予測して不足が出ないように一定数を学会開催校に前もって送付してもらい、これを誰かに

預かってもらってシンポジウム開催当日のスタンドに運びます。スタンド撤収後は残部を事務局に返すため、荷造りをして宅急便サービスを探して発送をします。印刷所から開催校に機関誌を送付してもらおうとしても、開催校に必ずしも編集委員や学会員がいるとは限りません。いずれにしろ毎年どなたかの好意に頼って以上のことを行っていました。また会費徴収のためには、アルバイトの学生さんたちに分かるように会費納入状況が分かるリストを複数作成したり、前もって学会印を押した領収書を用意をすることや、徴収した現金の管理など、神経を使う仕事ばかりです。

スタンドを出すことには二つの意味がありました。一つは出来るだけ早く『フランス語学研究』の最新号を会員の皆さんに手渡すと共に事務局が発送しなければいけない部数を減らすことです。もう一つは会費を確実に徴収することです。このうち前者に関しては今年度から『フランス語学研究』の発送を業者に委託することになりましたので、会場に来られなかった学会員の方も含めて全員が仏文学会開催の時期の前後に受け取れることとなります。これまでは、会場に来られなかった会員の皆さんへの発送は、事務局の編集委員が手作業で行っていましたので、多忙な時や事務局の状況によっては授業が無くなる7月頃にならないと発送作業が出来ないこともありました。会費徴収に関しては、会場での直接徴収はせず振り込みで払っていただくことになりました。これも財政的に苦しかった頃には早く確実にある程度の会費を徴収することが必要だったということもありますが、現在は多くの学会で振り込み等での支払いが主流になってきていることもあり、会計業務を簡素化するためにも直接徴収を廃止することになりました。

学会員の皆さんには以上のような変更を理解していただいた上で、会費は『フランス語学研究』に同封します振り込み用紙で速やかに払っていただくようお願いいたします。

(春木仁孝)

2. 旧事務局より

2006年4月からの3年間、事務局は福岡大学(佐藤・川島)と西南学院大学(西村・小熊)が担当しました。多くの方々のご協力をえて、無事に任期を終えることができました。特に前事務局の慶応義塾大学の方々からのご支援は、とても心強いものでした。とり

わけ喜田浩平さんが懇切丁寧なご指導をしてくださったおかげで、意外なほど早く事務局の仕事に慣れることができました。この場をお借りして、御礼を申し上げます。

事務局を担当したことで、学会がより身近な存在として感じられたことは、わたしにとって良い経験となりました。人が集まって学会が成立しているという当たり前の事実を、あらためて実感した次第です。

この3年間、事務局側の不手際や都合によって、学会員の皆様にご迷惑をおかけすることがあったかもしれません。当学会の事務局の業務は、専従の職員ではなく、担当する大学の教員が公務の合間を利用して行っています。学会員の皆様には、このような事情をご理解のうえ、ご容赦くださいますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、2009年4月より二度目の事務局を担当してくださる大阪大学の方々、どうかよろしくお願いたします。(川島浩一郎)

3. 前年度編集責任者より

この1年間、本ニューズレターと一緒にお届けする『フランス語学研究』43号の編集責任を担当しました。任命されてからは何か大きなミスがあったらどうしようと、不安の連続でしたが、この原稿を書いている現在、2校まで進み、雑誌の全体像が見えてきて少しほっとしています。

今回雑誌のレイアウトが大幅に変わりました。それまで全く気がつかなかったのですが、私が編集責任になってまもなく、編集委員の東郷雄二氏から雑誌の文字が小さくて読みにくいので、もう少し大きくしてはという提案を受けました。そんなものだろうかと思って似たような学術誌を見てみると、本当に私たちがは文字が小さく、びっしりと内容が詰まっている、という感じです。そこで、早速印刷所から見本を取り寄せて、大きめのレイアウトの可能性を探りました。これに併せて私が前々から思っていた注のスタイルも後注から脚注の形に変えることを提案することにしました。この提案が通り、今回刷り上がってきたものを見ますと以前と比べて格段に読みやすくなったような気がします。活版印刷で印刷費が高かった時代はフォントを小さくしてできるだけ多くの内容を押し込む必要があったのかもしれませんが、今は違います。ページ数が増えてそれだけ厚くはなりますが、内容が充実しているのでこのくらいの厚みでちょうどよいのではないのでしょうか。

今回から pdf ファイルも印刷所からいただけること

になりました。これは、将来的に雑誌全体を電子化し、広く公開するようにするための準備です。今まで歴代の事務局が抱えてきた雑誌のバックナンバーの保存は非常に大きな問題であり、どの事務局も大変苦労してきました。もし発刊後一定期間をおいたものを電子化して公開することができれば、在庫を必要以上に抱えておく必要はありません。現在国立情報学研究所が電子図書館の事業を進めており、この事業によって公開の道筋をつけていきたいと考えました。問い合わせしてみますと、著作権の処理や学会そのものの審査などがあってすぐにはできないのですが、そんなに難しくないことがわかりました。今年日本フランス語学会が日本学術会議の「協力学術研究団体」として登録されたので、資格の面ではクリアしたことになります。あとは著作権の問題の処理です。そこで、08年度第二回編集委員会で発刊後3年を経た在庫は10部を残して廃棄するが決められ、第二回と第三回の編集委員会で、今後 pdf 化を進めていくという方針が決定されました。

新しいことは他にもあります。これも東郷委員の提案で、今回から「論文」と「研究ノート」の執筆者に抜き刷りを贈呈することにしました。このように雑誌の形態をはじめとしてそのあり方がどんどん変わっていくという印象を私は日々受けておりました。そんな変わり目の時期に編集責任を仰せつかった光栄を感じるとともに、執筆者をはじめとして多くの方々の協力を深く感謝いたします。1年間本当にありがとうございました。(井元秀剛)

4. 新編集委員より

◆尾形こづえ (青山学院大学)

今年度より編集委員を仰せつかりました。どうぞよろしくお願いたします。先に編集委員をさせていただいていたのは91年～99年ですので、かなりの時間が経っています。この間編集にあたっておられた方々が力を尽くされて様々な新しい企画を打ち出したり、編集、運営の方法を整えて来られたので、新しい編集の方法をゼロから学びつつ、微力ながらフランス語学会のお役に立つことができれば幸いです。

最近、勤務先の刊行物になるべく専門的でないものをという条件でエッセイを書くことになり、普段あまり注意していなかったフランスの女性職業名について調べる機会がありました。これが始めてみたら予想以上に面白く、このエッセイの制約を離れてのめり込んでしまいました。確かに時代の趨勢は la ministre のような女性形使用に向っているものの、専門職につい

ているフランス人女性たちに実感を書いてみると、予想に反して女性側にも様々な理由から女性形を用いることに戸惑いや抵抗を感じている場合があることが分かりました。図書館司書の友人は、一般的に女性形の職名を使うことには賛成しているものの、自身は資格を取ってこの仕事に就いた80年代には *conservateur* が使われていたため、新しい女性形 *conservatrice* を自分の職名としては受け入れ難いとのこと。また図書館館長が女性で、普段はこの館長に対し *directrice* という呼称が用いられ、館長も受入れているが、正式な書類にサインする時は職名に *directeur* と書くとのこととも教えてくれました。より正式と考えられている書き言葉においては男性形を好む慣習が今も顔を出すようです。別の友人の周辺ではソルボンヌの同じ学科の二人の女性教授がそれぞれ信念に基づいて自身の職名に *professeur* と *professeure* を使っており、実際に科のサイト上でもこの2つの表記が見られました。新しい女性形を認めようとする方向と中性としての男性形を好む趨勢が拮抗しながら変化が進んでいるようです。

私自身の研究の中心はフランス語の動詞構文です。一つの動詞の構文可能性を調べている際など、実際の使用例を見ているだけで面白く、こんな構文も可能なの！と興味は尽きません。授業での学生の発表や論文にも新しい発見が多く、学生たちとことばについて発見する過程を共有することの面白さを実感しています。

◆France Dhorne (青山学院大学)

Après un petit repos de cinq ans, me revoilà donc à la tâche dans ce bureau de la SJLF. Comment vous faire part succinctement de mes interrogations présentes ? J'ai un peu relégué dans les malles au grenier mon passé de linguiste temporel comme aspectuel, mais il m'est bien difficile, vu l'importance des catégories, de ne pas remonter pour le sortir une fois de temps en temps. En revanche, les questions d'exclamation et d'émotion qui me taraudaient il y a cinq ans n'ont toujours pas trouvé de réponses. Je ne désespère pas d'y parvenir cependant. Peut-être aussi l'air du temps ne s'y prête-t-il pas ? On a pu ressentir un peu partout à cette époque comme une effervescence autour de ces deux catégories, mais qui serait en train de retomber comme un soufflé trop vite monté.

Mon présent est en réalité hanté par le jeu, ce qui n'est pas sans lien avec les deux problèmes

sus-mentionnés. Et je suis très reconnaissante aux personnes qui ont eu l'idée de mettre sur pied un groupe de recherches sur le jeu de mots. Comment être passée jusqu'ici à côté de ce grand essai de Johan Huizinga sur *Homo ludens*, une révélation ? Le génie de l'auteur est sans doute d'avoir enveloppé sous le vocable unique de *jeu* toute cette part essentielle de l'être humain, aussi vitale que le boire et le manger. L'ouvrage est construit autour de toutes les acceptions du mot dans les langues qui ont un substantif unique pour y référer. La compétition y côtoie la poésie ou la loi, et tous leurs liens s'éclairent. On notera cependant que la frivolité qui connote ce lexème ou même qui le dénote (pour Huizinga), rend un peu difficile sa reconnaissance comme sujet d'études. L'appellation latine d'*Homo ludens* est une trouvaille qui lui rend ses lettres de scientificité. À une époque où les sciences humaines partout dans le monde s'interrogent sur leur devenir, une lecture ou relecture de cet ouvrage pourrait être salutaire, car source de création.

Dans l'attente du *shigeki* des recherches de chacun, j'espère pouvoir apporter une petite aide.

◆酒井智宏 (慶應義塾大学非常勤講師)

大学では英文科に在籍し、第二外国語はドイツ語でした。大学2年だった1994年9月20日に、書店でふと目にしたフランス語の入門書と辞書を買って、「ボンジュール」から独学を始めました。大学でのフランス語履修単位数はゼロで、以後、現在に至るまで独学です。他にこれほど長続した趣味はありません。学生時代は毎日学費と生活費を稼ぐための単調作業のアルバイトをしながら、将来は研究と教育だけで食べていける人間になりたいと願っていました。非常勤とは言え、その目標を達成できたことを嬉しく思います。

しかし、プロの世界に入った以上は、プロの世界にいることに満足してはいけません。志の低い人間はそれよりもさらに低い実績しか挙げられず、ユニフォームを脱ぐ羽目になります。この厳しい世界で生き抜くためには、「フランス語が好き」といった憧れだけでは通用せず、自分の頭で考えて自分にしかできない個性的な仕事をする必要があります。「100点を取って目立つことができないなら0点を取って目立てばいい。平均点を取っても仕方がない。」という思いでやってきましたが、今のところ成功しているとは言いがたく、

あれこれ試しては失敗するということを繰り返し、ついに四捨五入すると不惑を迎える今年になっても自分のスタイルを確立できずにいます。新しい変化球を覚えては打たれ、の繰り返しです。覚えたと思ったのはすべて錯覚だったのです。能力が乏しい以上、限られた能力を最大限に生かすための試行錯誤は一生続けるしかありません。

個性も大事ですが、プロにとって何よりも大事なことはグラウンドに立ち続けることです。好調時も不調時も、常にグラウンドに立たなければいけない。だから、みっともないと言われても、粗製乱造と言われても、学会発表と論文執筆を休まず続けることを心がけてきました。内容が乏しい上に数まで少ないのでは目も当てられません。また、プロの世界では、言い訳しようと、泣こうと、ダメなものは叩かれます。だから、堂々と発表し、堂々と叩かれることを心がけてきました。どうせ叩かれるのなら、せめて堂々と叩かれなければ惨めです。「自信なさそうにするくらいなら発表するな」ということです。

個性や自信は、根拠のないものであってはなりません。世間はPだと言う。自分は $\neg P$ (= P の否定) だと主張する。これだけなら反抗期の子供にもできます。P の否定 $\neg P$ を作る能力と、思ったこと口に出せる程度の精神力さえあればよいからです。学問の世界ではそれだけでは不十分で、 $\neg P$ という主張を裏付ける根拠を提出し、最終的には $\neg P$ が根付く世界像を提示しなければなりません。なぜPではなく $\neg P$ なのか。ここから先は精神論ではダメです。ひたすら勉強して考えるしかない。他の研究者の声に耳を傾けつつ、自分の頭で考える。編集委員になっても、それは変わりません。

5. 本年度編集責任者より

本年度は私、喜田が編集責任を担当させていただきこととなりました。論文や研究ノートなど既存のジャンルのクオリティを維持するのはもちろんのこと、可能であれば何か独自の企画によってより充実した紙面作りができるよう精進してまいります。

編集委員会では、表紙の変更やバックナンバーのPDF化などが検討されています。前任の井元氏が先鞭を付けてくださいましたので、できるだけ早く実現できるよう努力する所存です。

『フランス語学研究』の号数は、私の年齢とほぼ同数（実際は年齢に1を加えた数字）であるため、毎年新しい号が刊行されるたびに、同級生（しかもかなり優秀な同級生）の活躍を見守っているような感慨を覚えています。

した。今回は編集責任という大役によって、その同級生と共同で仕事をするような心境です。彼の（彼女の？）今までの実績を損なわないよう、全力でサポートしたいと思います。会員の皆様のご協力をお願いいたします。
(喜田浩平)

6. 2009年度例会予定

第255回 5月22日(金) 15:00-18:00

東京大学(駒場) 18号館4階コラボレーションルーム1

東郷雄二(京都大学)「談話管理と時制—単純過去と半過去をめぐって」

シンポジウム 5月23日(土) 10:00-12:30

中央大学理工学部後楽園キャンパス5号館5534室

テーマ:「ことばに主体はどのようにあられるか: フランス語と認知言語学」

武本雅嗣(山口大学)「虚構移動表現と主体化」

阿部宏(東北大学)「主観性と文法化・無意味文・省略文」

鍋島弘治朗(関西大学)「Recanati の理論と認知言語学」

司会: 大久保朝憲(関西大学)

第256回 6月27日(土) 15:00-18:00

慶應義塾大学(三田)西校舎 525A

治山純子(東京大学大学院)「感情表現の身体性—「目」に関するメタファー表現を通して」(仮題)

中田俊介(東京外国語大学大学院)「フランス語アクセントの音韻論的構造」

第257回 7月19日(日) 13:00-16:00

慶應義塾大学(三田)西校舎 523B

濱上桂菜(大阪大学大学院)「現代フランス語における動詞起源の名詞について—動詞の構文とメトニミーの関係から」

平塚 徹(京都産業大学)「道具として解釈される場所前置詞句」

第258回 9月26日(土) 15:00-18:00

慶應義塾大学(三田)

志村佳菜子(慶應義塾大学大学院)「フランスの広告の中の言葉遊び」

稲葉梨恵(筑波大学大学院)(題未定)

第259回 10月24日(土) 15:00-18:00

慶應義塾大学(三田)

古賀健太郎(東京外国語大学大学院)(題未定)

大塚陽子(白百合女子大学)「フランス語会話に見られる遊戯的側面」

第260回 11月(日時未定)

(会場未定)

小田 涼 (関西大学非常勤) (題未定)

出口優木 (京都大学大学院) (題未定)

第 261 回 12 月 5 日 (土) 15:00-18:00

慶應義塾大学 (三田)

酒井智宏 (慶應義塾大学非常勤) 「意味排除主義とト
ートロジー」 (仮題)

石野好一 (愛知県立大学) (題未定)

案内はメーリングリスト **Frenchling** でのみ行い、
郵送による通知は行っておりません。Frenchling に加
入しておられない方は世話人のアドレスにお知らせい
ただければ、個人宛にメールでご案内します。

(前島和也)

◆関西フランス語研究会

関西大学を会場に、関西の大学院生と教員が中心にな
って研究会を開いています。秋には日程の調整が難しく
なかなか開くことができませんが、月の後半の土曜日に
1 回行うことを原則としています。時間は、原則として、
午後 2 時から 5 時です。昨年度の発表は以下の通りです。
5 月

藤田康子 「Qui est luthiste? 型コンピュータ文と存在前
提」

6 月

濱上桂菜 「話し手の心的な視点の移動からの半過去理
解再考—愛称語の半過去・市場の半過去・遊戯の半過
去・間一髪半過去の半過去について—」

7 月

山本香理 「認知対象を表わす不定詞表現と節表現」

3 月

濱上桂菜 「現代フランス語における動詞起源の名詞
について—動詞の構文とメトニミーの関係から—」

この研究会の趣旨は、論文や学会発表をひかえる人が
その準備のために、あるいはまた、関東で発表を終えた
人が関西でそれを聞けなかった人のリクエストにこた
えてというように、形式にこだわらず、気軽に意見・情
報の交換ができる集まりです。また、最近の研究発表が
中心ですが、新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究
の動向についての紹介や解説なども歓迎しますので、発
表を希望される方は世話人の平塚か大久保までご連絡
ください。昨年は 4 回しか開けませんでした。アット
ホームな雰囲気のできる集まりです。学生の方も遠慮せず
にどんどん発表してください。

案内はメーリングリスト **Frenchling** のみで行って
いますが、加入されていない方は世話人までアドレスを
お知らせいただければ、個別にメールでご案内いたしま
す。

平塚徹 : hiratuka@cc.kyoto-su.ac.jp

大久保朝憲 : tomonori@ipcku.kansai-u.ac.jp

(平塚 徹)

7. 各地の研究会だより

◆フランス言語学を一緒に勉強する会

この会は 1993 年に始まり、毎月 1 回、3 時から 6
時まで研究会を開いてきましたが、発表者や参加者の
減少に対処するために、昨年は開催時刻の変更、開催
回数を減らすなど幾つかの変更をいたしました。しか
しそれでも発表希望者や参加者の減少という大きな流
れには逆らえず、今年度は前期 1 回、後期 1 回の年 2
回に縮小するという抜本的な変更を迫られることにな
りました。来年度以降に関しては、発表希望者および
参加者の人数などを見ながら、その時々状況に合わ
せた研究会のあり方を模索していくつもりです。ご意
見やご提案がおありの場合は、下記世話人までご連絡
ください。

現在のところ今年度の開催日、発表者は未定ですが、
前期は 7 月開催を予定しています。また、会場を現在
の上智大学から慶応大学 (三田) に変更いたしますの
で、お間違いのないようお願いします。開催の詳細
が決まりましたら、メーリングリスト **frenchling** に開
催日の 2 週間前位にその詳細をお知らせします。

昨年度は以下のような発表がありました。

4 月 19 日 川口順二 (慶応大学)、中尾和美 (東京
外国語大学非常勤講師)、志村佳菜子 (慶応大学大学院
DC) 「ブランド名・商品名をめぐって」

6 月 14 日 大久保伸子 (茨城大学) 「初等文法授業
に言語学的視点を加味する試み—代名動詞、冠詞」

7 月 12 日 Simon Tuchsais (上智大学) 「modalité
と modalisation について」

9 月 20 日 大塚陽子 (白百合女子大学助手) 「遊び
と会話、ポライトネスの観点から」

10 月 4 日 工藤進 (明治学院大学) 「双数 (複数)」

12 月 13 日 市川慎一 (早稲田大学名誉教授) 「新大
陸の langue vernaculaire 雑感—カナダの言語問題を
中心に—」

勉強会での発表を希望する方は、世話人の前島和也
kazuyax@econ.keio.ac.jp まで御連絡下さい。論文や
著書の紹介・論評なども歓迎いたします。

8. 「フランス語研究促進プログラム」による 共同研究について

「ことばを (で) 遊ぶ」というテーマで現在進めてい
る共同研究について、ご紹介したいと思います。

この企画は、日本フランス語学会2007年度「フランス語研究促進プログラム」に採択され、2008年度より運営されています。「フランス語研究促進プログラム」については『フランス語学研究』第43号をご参照ください。

「遊び」というテーマは、これまで言語学ではあまり扱われることがありませんでした。この「遊び」をキーワードにして、多様な観点から言語を考察することで、フランス語学に新たな分野を開拓することができるのではないだろうかという野心的(かつ楽天的)な思いつきを、この企画の出発点としました。

参加者の募集は、プロジェクト案を提出していただくという形で行い、その結果、13名の学会員による共同研究がスタートしました。採択された研究テーマは以下の通りです。

「ことばの遊びと意味決定の政治学」、「言語行為としてのボケ」、「会話を/で遊ぶ — フランス語日常会話に見るポライトネス・ストラテジーとしての<遊び> —」、「フランス語表現の音声面に基づく「加工」について」、「固有名詞の語源とことば遊び」、「トートロジーとことばの遊び」、「広告における遊び: テキストと静止画像のかかわりの中で」、「Jean-Pierre Brissetの作品におけるJeux de motsについて」、「Comment la publicité joue avec les mots, joue sur les mots, se joue des mots」、「商品名に見られる遊び」、「レトリックとことば遊び」、「Charade, Devinetteにおける比喩的効果」、「条件文の多義性 — 言語構造の「あそび」」

本プログラムは、これまで次のような活動経緯をたどっています。

- 2008年5月 参加希望者がプロジェクト案を提出
- 同6月 参加者決定、メーリングリスト立ち上げ
- 同8月 参加者のプロジェクト案について全員がコメントを交換、議論
- 同12月 第一回フランス語研究促進プログラム研究会: 参加者各自の研究発表(慶應義塾大学三田キャンパスにて開催)
- 2009年3月 第二回フランス語研究促進プログラム研究会: 共通のテーマをもとにグループ発表(慶應義塾大学三田キャンパスにて開催)
- 同4月 各自による参考文献の提出、文献リストの作成

現在は、メーリングリストを用いた情報交換や議論を継続すると同時に、「ことばを(で)遊ぶ」をテーマに

したウェブ・サイトの開設を検討中です。

今後は、論文執筆、査読を経て、企画の最終的な成果報告として、『フランス語学研究』別冊の論文集を刊行し、学会員の皆様のお手元に届ける予定です。

(前島和也・中尾和美・川島浩一郎)

9. 留学に関する情報

以下では、留学を検討しておられる大学院生のみなさまへの情報として、まだあまり知られていない比較的新しい制度を、実際に経験なさったかたがたに紹介していただきます。日仏共同博士課程について木島愛さん(筑波大学大学院・フランシュ=コンテ大学大学院)、博士論文の日仏共同指導(cotutelle)について安藤博文さん(名古屋外国語大学大学院・プロヴァンス大学(エクス=マルセイユ第一大学)大学院)が寄稿くださいました。

◆ 日 仏 共 同 博 士 課 程 (Collège doctoral franco-japonais)

2006年9月から、日仏共同博士課程によって、フランスのフランシュ・コンテ大学(ブザンソン)に一年間留学しました。この制度は、博士課程という高いレベルでの知識、技術の交流を図るためのもので、日本とフランスの加盟大学に在籍し、両大学の指導教官による共同指導の元に、博士論文を仕上げることを目的としています。私は幸いにも在籍している筑波大学、フランスの指導教官であるダニエル・ルボー氏が所属するフランシュ・コンテ大学(ブザンソン)も加盟大学であったため、申し込みました。

フランス政府給費とは異なり、この制度では、理系をはじめとする様々な分野において、博士課程レベルでの知識、技術交流、さらに、指導教官同士の交流を目的としているため、フランス語に関する試験などは一切ありません。日本の加盟大学の窓口を通して書類(日本語、英語)とフランスの指導教官による許可書を提出します。9月からの留学に対し、結果通知が同年4月末、5月の中旬に3日間の研修を行います。この研修では、どのように博士論文を書くか、フランスでの口頭試問はどのように行うかというのが主な内容であり、日本で博士論文を提出するという本来の狙いとは逆のものでした。日仏共同博士課程創立当初、どちらかの大学で博士論文を提出すれば、両大学で学位が取得できるというのがこの制度の利点だったのですが、日本の法制度ではそれが認められず、1年間フランスで勉強して日本で博士論文を出すという方向に変わったそうです。

留学中は、日本の大学に授業料を納める代わりに、フランスで授業料を払う必要がないのですが、まだ認知度が低いため、毎年授業料納付に関するトラブルがあるそうです。奨学金に関しては、毎月、日本の在籍大学の窓口連絡を入れ、大学を通じて日本コンソーシアム事務局へ在籍報告がなされ、それを受けて、日本国内の銀行に振り込まれます。日本円で支給されるため、円安だった 2006 年度は奨学金のみでの生活は厳しいものでした。

通常の留学と異なる点は、日仏両大学の指導教官による共同指導が目的のひとつである点です。複数の指導教官の下で研究できることは、視野が広がり、今までとは異なるアプローチが可能になります。また、フランスの博士課程の学生と交流することにより、言語学の分野では、談話分析、メディア言語学、ソフトウェアを用いたコーパス研究など、様々な知識を吸収することができ、私にとっては有意義な一年になりました。

なお、加盟大学など、日仏共同博士課程の詳細については、日仏共同博士課程日本コンソーシアムのホームページ <http://www.cdfj.jp/> を参照してください。

(木島 愛)

◆博士論文の日仏共同指導 (cotutelle)

本稿では、日仏の博士課程に登録する意思のある学生であれば申請の権利を持つ博士論文の共同指導 (cotutelle de thèse) のシステムを私の体験を通じて紹介したい。cotutelle はフランス教育省の「博士課程教育に関する 2006 年 8 月 7 日の省令」および「博士論文の国際共同指導に関する 2005 年 1 月 6 日の省令」に基づく国際的な博士課程共同指導協定の枠組みである。具体的には、二国間共同指導と博士号取得を目的として、両国の大学が、申請を行う学生を仲立ちとして 3 年間有効な 1 回限りの協定である。その点で、二大学が直接に長期的な協定を結ぶ交換協定等とは性質が異なる。原則的にはどの国の大学とも締結可能とされており、人文、社会、自然科学など多様な分野に適用される。

申請にはフランスの博士課程の第 1 年目に登録し、同時に外国の博士課程に属することが前提となる。私の場合、2007 年 4 月から日本の博士課程に属しており、そのうえで 2008 年 9 月よりフランスの博士課程 1 年目に登録を行った。このように、それぞれの博士課程が始まる時期は同時でなくてもよいが、論文審査および口頭試問は同時に行う必要があるため、日本の大学院を一時休学するなどして在籍期間を調整することもできる。

協定書は上記の省令に基づき、フランス国内の各大学が様式を定め、a)協定の期間、各大学院の在籍期間、学費の規定。b)研究分野と論文のテーマ。c)どちらの国の言語で論文を書くか(要旨はもう一方の言語で添付)。d)どちらの大学でどちらの言語を使用して口頭試問を行うか、などが記載される。協定書には、口頭試問の審査委員は両国より最低各 2 名、同人数によって構成される旨などが記載されている。これに両国の大学の指導教官、研究所長、学長、学生自身の計 7 名のサインをもって協定締結となる。論文の提出時期や審査、口頭試問の審査委員等については、フランスの省令で定められ、同時に外国の所属機関の要件を満たす必要がある。

問題は、日本ではこのシステムが十分に知られておらず、また日本の各大学院の規定と抵触する可能性もあり、現時点で cotutelle を行うには日本の大学院研究室および学長の決断に多くの期待をしなければならないことである。大学院側から見れば、わずか一人の学生のために大学院の規定の大幅な変更も考えられるので、その煩雑さから協定に難色を示すことも考えられる。枠組みではどちらの国で口頭試問を行うことも可能だが、日本では日本において口頭試問を行わなければ日本の博士号は授与されないという規定があり、現状では日本の大学で口頭試問を行わなければならないであろう。

とはいえ共同指導は、両国の研究室や指導教官から知見を得られ、研究上のメリットは大きい。また一報の論文と一回の口頭試問をもって、両国博士課程から博士号が付与されるため、学生は一度に両国の学位を得られること、共同指導を期に、両国研究室間の研究交流が創出され、活性化も期待されるなど cotutelle から得られるメリットは、学生、大学院側の双方にとって大きいといえるのではないだろうか。(安藤 博文)

10. 収支決算報告

従来別紙にて配布しておりました前年度の収支決算報告を、今号から毎回、ニューズレターに組みこむことといたしました。最後のページをご覧ください。

11. 編集後記

別の学会でも委員をしておりますが、その仕事の合間の雑談で、日本フランス語学会の話題になったことがありました。学期中は毎月例会をして、発表者が通常ふたりいる、しかもひとりの研究発表の持ち時間が質疑応答を入れると 1 時間半もある、学会誌には論文だけでなく多種の記事があり、その学会誌の編集作業はいうにおよ

ばず、もちまわりで事務局を担当することなども、運営全般が編集委員の無償の仕事によって支えられている、などの事実が大いに驚嘆していただきました。それらの事実にあらわれているフランス語学会の伝統を、ありがたく思いました。もちろん、フランス語学のみならず、学問全般をとりまく環境がはげしく変転している現在、旧来の方法だけですべてを乗りきれぬわけではありませんが、研究という実質をなにより大切にしていることは、われわれの学会の、変えてはいけぬ根幹的な特徴であるように思います。このニューズレターにも、そう

した特徴の一端があらわれていると感じていただけるなら、とてもうれしいことです。今号の編集・発行にご協力くださった執筆者のみなさま、そしてレイアウトと版下作成、印刷所との打ち合わせをご担当くださった平塚徹さんに、こころより感謝申し上げます。

(渡邊 淳也)

ニューズレターのバックナンバーは、日本フランス語学会のホームページで読むことができます。

<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/belf/home.html>

2008 年度収支決算報告

(単位 円)

収入の部		支出の部	
会費	842,000	BELF42号印刷代金	405,300
機関誌売上金	109,200	BELF43号編集実費	20,000
広告収入	110,000	ニューズレター印刷代金	14,280
利息	666	発送費・通信費	190,452
小計	1,061,866	特別発表(講演)謝礼	180,000
前年度繰越金	4,521,335	人件費	33,000
計	5,583,201	会場費	47,880
		事務消耗品費	1,875
		振込手数料	1,890
		雑費	283,240
		小計	1,177,917
		次年度繰越金	4,405,284
		計	5,583,201

次年度繰越金の内訳は次のとおり。

銀行預金(三井住友銀行普通預金)	114
郵便貯金(普通)	1,173
(振替)	3,505,658
銀行預金(三菱東京UFJ銀行普通預金)	152,223
銀行預金(三井住友銀行定期預金)	740,842
現金	5,274
計	4,405,284

2009年3月31日

〒814-0180

福岡市城南区七隈8-19-1

福岡大学 人文学部内

日本フランス語学会